

地方真宗僧侶の集書活動

——筑前国春吉妙徳寺円超・大忍の場合——

木本 拓哉

はじめに

福岡市中央区春吉にある柳光山妙徳寺（浄土真宗本願寺派）に所蔵文化財について、西国真宗史研究会による調査を行った^①。それにより本堂再建に合わせて寺史を発行した^②。また筑紫女学園大学人間文化研究所の浄土真宗文化財調査研究プロジェクトによる悉皆調査も行った^③。

これらの調査により、本願寺第九世実如の「六字名号」や寛永十二年（一六三五）に本願寺から本尊が下付されたことが分かる。「木仏御札」、正徳二年（一七一二）に親鸞聖人御影・聖徳太子御影・七高僧御影を本願寺から受けた際の「免許状」などが所蔵されていることが確認さ

れた。この他には本願寺第二十二世大谷光瑞の妻大谷簪子の和歌懐紙や島地黙雷・赤松連城の和歌短冊なども所蔵されていることも判明した^④。

妙徳寺の寺伝によれば開基は弘善（または「愚善」ともされる）で、慶長の初めごろ（一五九六〜一五九九）に出家したとされている。葉院町（現在の福岡市中央区警固）に庵を結んでいたが、慶長六年（一六〇一）に庵を開いた場所に黒田長政が警固神社を建立するように命じたので、代替地として現在の春吉の地が提供され、庵を移した^⑤。先に挙げた木仏本尊が下付された時は第二世正安の代で、三つの御影を免許されたのは第六世松雲の代である。第七世宗達の宝永七年（一七五七）に火災により本堂を焼失したが、第八世僧侃により安永二年（一

七七三)に本堂は再建された。その後、第十一世麟号が文政九年(一八二六)に飛檐列座を免許される⁶⁵⁾。そして現在までその法灯が守られている。福岡城下と博多との間にあるため、人々の往来が盛んな賑わいのある場所であつたと思われる。

本稿はこの妙徳寺の歴代でも第十二世円超と第十三世大忍の二代を取り上げて、二人の集書活動について考察するものである。その理由は、円超の頃から識語や蔵書印が押されている書物が増え、所蔵者が明確に特定できるからである。大忍は明治二年(一八六八)に妙徳寺に入寺している僧侶である。円超は天保十年(一八三九)に、大忍は天保十一年(一八四〇)に生まれていて、円超は明治三十年(一八九七)に、大忍は明治三十五年(一九〇二)に逝去しているので、円超と大忍とは同世代となり、両者を取り上げることで、別々の地域で生まれた二人の僧侶の集書活動の特徴が見えてくるだろう。そのため本稿では円超・大忍の二代の集書活動について考察を進めていきたい。

江戸時代の人々の集書や読書などの活動に関しては、若尾政希氏が「領主層から民衆までの社会各層の諸主体

がいかにかに形成されたか、それにどんな書物が関わったのかについて、事例を一つひとつ蓄積していかなければならない」と述べているように、人々の集書や読書は社会的立場や地域的環境によって形態も内容も大きく異なるので、個々の事例の蓄積が必要である⁶⁶⁾。この問題意識を持って引野亨輔氏は備後国沼隈郡の大東坊(浄土真宗本願寺派)の集書活動について考察を行っている⁶⁷⁾。これにより大東坊大慶が、出版業が盛んであつた京や大坂に近い大和国で長らく過ごしたために多くの書物を集めることが出来たことや、大慶の読書行為が「批判的読書」であつたことが解明された。真宗学僧の読書活動を鮮やかに解明した引野氏の研究は今後の道標となるものだ。本稿はこの引野氏の研究を踏まえつつ、妙徳寺の二人の僧侶の集書活動について考察するものである。筆者が調査に関わつたのはまだ二ヶ寺だけであるので、普遍化するまでの事例の蓄積が出来ていない。そのため本稿は江戸時代の真宗僧侶の集書活動における課題を整理し、今後の調査研究の指針を提示することが目的であることをあらかじめ断つておく。

本題に入る前に本願寺派の僧侶の学問について整理し

ておきたい。教義を巡って対立していた三業惑乱が落ち着き、文化四年（一八〇七）に再開された学林は、当時の学問を志す僧侶たちが目指す最高の学び舎であった⁽⁹⁾。その頃に行われていた講義は、本講として『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』の三経、七祖（龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然）の講義書、宗祖親鸞の『教行信証』を除く和語や漢語の著述であった。附講として三経、七祖の聖教、宗祖の和讃や漢文聖教など宗義に関するものが講義されていた。他宗派のものとしては天台宗のものが多かった⁽¹⁰⁾。また、天保三年（一八三二）八月勸学八名、司教一〇名、助教五〇名、得業無制限という学林の有階者の定員が定められるに伴い、学位登科御定書が天保七年に出され、学林で行う鬘試と本願寺で行う殿試の制度が設けられた。鬘試では宗派の学問や典籍についての正学試という試験と、他宗派の学問や国学・儒学・暦学・書学の五学科の試験である兼学科があった⁽¹¹⁾。これらのことを踏まえると、真宗僧侶は宗派の学問は勿論のこと漢文も学ばなければならなかったし、学僧として上を目指すのであれば国学や儒学も必須の学問であった。

落ち着きを取り戻した学林で研究が深まるにつれ、個々の学者に特色ある学説が生じ、学派が形成されるに至った。主要な学派のほとんどが僧樸の門下から出ており、僧樸の元で学んだあとに地元に戻り多くの僧侶を指導した⁽¹²⁾。代表的な学派に越中の僧鎔の空華学派、安芸の大瀛の苜園学派などがある⁽¹³⁾。その中でも九州に関するものには、曇龍の龍華学派、崇廓の豊前学派、大同の筑前学派、環中の肥後学派がある⁽¹⁴⁾。このように本稿で取り上げる妙徳寺の二人の僧侶が生きた江戸後期から明治に至る時代は、学林を中心に各地で活発な学問活動が展開した時代であった。

ここで学林について述べたのは、学問という知的営為が書物を集める作業の上にあるからである。師につき教えを受けることも学ぶ方法であるが、多くの書物を手に入れ、それらを読むことも学ぶ方法でもある。書物を集めることが学びへと繋がり、学ぶためにも書物を集めなければならぬ。このことを念頭におきつつ、本稿で解明したいことは、僧侶の集書活動についてである。その中でも、真宗僧侶がどのような書物を集めていたのか、どのような場で収集していたのかということである。

一、妙徳寺蔵書の概要

筑紫女学園人間文化研究所による妙徳寺所蔵文化財の
悉皆調査において、筆者は典籍類の調査の分担者となつ
た。典籍類を調査するにあたり二つのことを決めた。そ
れは調査する典籍を限定する二つの基準である。一つ目
は、装丁が右側を糸で綴じた和本であること。二つ目は、
印刷が木版印刷もしくは活版印刷であること。これらに
より江戸時代から明治時代にかけての和本を抽出でき
たと考えられる。それらを形態や字体により版本、写本、
近代活字本（活字印刷の和装本）の三つに分類して整理
し調査を行った。それにより妙徳寺には版本が六三七冊、
写本が二八三冊、近代活字本が六一冊所蔵されているこ
とが確認された。

版本には『親鸞聖人御一代記』（享保四年刊、北村四郎
兵衛版）・『真宗法要』（明治二十三年刊）などの真宗関係
のもの他に、癡空『法華玄義釈籤講義』（嘉永二年刊、
東叡山蔵版）などの天台や俱舎のものも所蔵されていた。
宗教以外のものとして『日本書紀』（再刻、十四冊）・『日

本外史』（元治元年新刻、二十二冊）の史書の所蔵も確認
された。

写本の九割は『正信偈』・『蓮如上人御一代記聞書』な
どの真宗関係のものを中心とした仏教書であった。写本
はその書物が手元に必要であるから書き写すわけであり、
その書写の背景には学びがある。そのため写本のほとん
どが仏教書であることは領ける。妙徳寺歴代の学問への
意欲を窺い知ることができる。

妙徳寺の蔵書で目に付くのは漢学書の多さである。⁽¹⁵⁾ 版
本では『春秋左氏伝』（宝暦五年刊）や『大学章句』（天
保九年再刻）、『礼記』（天保十二年補刻）などの四書五経
の儒学経書をはじめ、『龍頭評註唐宋八家読本』（明治十
八年）・『明清八家文読本』（明治十九年出版）、『正文章規
範評林註釋』・『統文章規範評林』（明治九年版權免許）な
どの漢文学に関する書物などが所蔵されており、総数が
二一二冊であった。これは版本の三割強を占めることに
なる。写本の漢学書は三十一冊あり、写本の一割程度で
あるため多いとは言えないが、漢学書を書写して集めら
れていたことは確かである。

所蔵典籍の中で最も古い識語は写本『嗑囊鈔注解・鍵

陀国王経』に書かれている「元禄十六年十月廿九日第廿
□松雲（花押）」である。松雲と名乗った住職は歴代の中
で三人いるが、元禄十六年（一七〇三）という年号から、
宝暦四年（一七五四）に没した第六世松雲と考えられる。⁵⁶⁾

その後は第十世鳳兮、第十一世麟兮の識語が記されてい
たり、蔵書印が押されていたりする書物が所蔵されてい
た。鳳兮は版本六冊、写本一冊で、麟兮は版本六冊、写
本七冊である。あくまでもこれは識語や蔵書印が押され
ていることにより両僧の所蔵と確認できる数であり、勿
論この他にも所有していたと考えられる。その後の第十
二世の円超は版本が十七冊、写本が十四冊と少し増え、
第十三世大忍になると版本四十四冊、写本八一冊、近代
活字本二冊と更に増え、第十四世大巖になると版本八六
冊、写本二二冊、近代活字本四七冊となっている。大巖
が生まれたのは明治三年（一八七〇）であるから、明治
時代に入って集書活動をしていることになる。大巖の集
めた版本の半数は明治時代に入って刷られた版本であり、
それと近代活字本とを合わせると、大巖が集めた印刷さ
れた書物の大半は明治時代に刷られたものである。大忍
と大巖の二人が集めた書物の形態を比べてみると、大忍

が集めた写本の数に比べると大巖の数が少ないことが分
かる。江戸時代から明治時代への転換の一つに、写本に
よる集書活動の終息があると考えられる。

二、円超の集書活動

円超は天保十年（一八三九）に第十一世麟兮の子とし
て生まれた。文久元年（一八六七）に本山から二代飛檐
として相続が許され、翌年の文久二年に住職を継職し第
十二世住職となっている。しかし病気のために退隠する
こととなり、そのため炤蓮寺から大忍が入寺することに
なった。

円超は版本が十九冊、写本が十五冊に識語や蔵書印を
残している。それを列挙してみるとこのようになる。

〈版本〉

①玄雄『二巻鈔分科』

②梅膺祚音釈『字彙』（子、丑、辰、酉、戌、亥、補遺）

③『徂徠集』（巻八・九・十、巻十一・十二・十三・十

四、巻十五・十六、巻十七・十八・十九の四冊）

④『道春点 大学章句』

- ⑤ 『如実修行篇』 下
- ⑥ 『増補 唐詩材』
- ⑦ 『毛詩鄭箋』 (卷一・二・三の一冊)
- ⑧ 『七祖聖教』 中、下
- ⑨ 『真宗法要』 (卷十八・十九・二十の一冊)
〈写本〉
- ① 『帰命积聴記』
- ② 『論題』 (出世本懐・十劫久遠)
- ③ 亀井昭陽 『大学考』 「嘉永七歳寅極月下旬写之 积円
超十七歳写之」
- ④ 『錦繡段』 「积円超什物」
- ⑤ 玄雄 『領解文聞記』 「筑前福岡春吉寺妙徳寺円超十七
歳万行寺於テ写之也 嘉永七寅年正月下旬」
- ⑥ 亀井昭陽 『家学小言』
- ⑦ 曇龍 『大谷聖人肉妻訣』 上
- ⑧ 『玄義分禽通別時意章講義』 「前筑福城妙徳寺円超写」
- ⑨ 『毛詩考』 (卷一・二・三、卷六・七・八、卷十・十
一・十二・十三・十五の三冊)
- ⑩ 『漢詩草稿』
- ⑪ 廓亮 『浄土文類聚鈔嵩信記』 卷三

⑫ 針水『論題』

⑬ 『蛾子』 上

円超は『真宗法要』や『七祖聖教』などの真宗の重要な教典を中心に大瀛(廓亮)・曇龍・玄雄・針水などの勸学のものを集めていた。⁷⁾曇龍は妙徳寺と同じ福岡にある万行寺の住職でもあり龍華教校を開いて多くの僧侶を指導していた。玄雄と針水とは共に曇龍のもとで学んだ学僧である。両僧の書物を所有していたことにより円超は龍華学派の学問に触れていたことになるだろう。

円超の蔵書で興味深いのは漢学書の多さである。先に述べているように真宗僧侶には漢文の素養が必須であった。版本⑦『毛詩鄭箋』に関しては、巻四以降の四冊には「文政九年戌三月上旬妙徳寺麟兮求之五卷内」と記しており、更に麟兮の蔵書印が押されているので、麟兮が五冊本を入手したが何らかの理由で一冊目を紛失し、円超が新たに一冊目を求めたようだ。また二冊目以降にも麟兮の蔵書印とともに円超の蔵書印も押されていた。円超のものとして挙げていないが『詩学速成』にも麟兮の識語と蔵書印とともに円超のものが見える。このように円超は父である麟兮のものを受け継いで学んでいたと考

えられる⁽¹⁸⁾。

そしてこれらの漢学書で着目したいのが亀井南冥・昭陽父子の著作があることである。⁽¹⁹⁾ 写本③『大学考』、⑤『家学小言』、⑧『毛詩考』、⑫『蛾子』はいずれも亀井昭陽の著作である。また⑫『蛾子』は「亀井昭陽」と書かれた包紙に入れられており、この中には『論語語由』、『東遊賦』、『国語考』などの南冥や昭陽の著作の写本も収められていた。これにより円超は南冥や昭陽のものを積極的に書き写していたことが見えてくる。亀井南冥は福岡藩儒として西学問所の甘棠館を興し、教育に努めた学者である。その南冥の学問を受け継いだ昭陽も、藩校甘棠館を受け継ぎ多くの子弟を育てている。亀井門下として秋月藩儒原古処や日田咸宜園廣瀬淡窓・廣瀬旭荘らがいる。福岡藩儒まで務めた学者を輩出した亀井家は、福岡城下や博多において、僧侶も含めた福岡の武士や博多の町衆などの多くの人々が知るところの家だったと思われる。

亀井家と真宗とは関係が深く、南冥の母は本願寺派の浄満寺から嫁いできている。その関係で現在も浄満寺内に南冥をはじめ昭陽らの墓がある。また南冥は十七歳の

宝暦九年（一七五九）の時に長崎に遊学しているが、その折に同道したのが真宗僧侶の大同である。大同は浄満寺の隣寺真福寺の生まれで、福岡甘木の教法寺行周の後を継ぎ、講学を行った。前述した筑前学派の祖大同こそ、この人である。⁽²⁰⁾ 南冥自身も神仏への親近感を述べており、亀井家学にも仏教を受け入れる思想的余地があり、真宗側にも亀井家学を受け入れる土壌があつたと考えられる。⁽²¹⁾ また朝倉三奈木の品照寺に覚円という僧侶がいるが、彼は亀井四天王と呼ばれる調黄溪と親しい人物であり、また覚円は亀井昭陽の『東遊賦』を書き写している。⁽²²⁾ 赤松連城が学んだ日田の咸宜園は廣瀬淡窓が開いた漢学塾であるが、淡窓は南冥の元で学んだ人物であるため、学統的に連城も亀門に属することになる。江戸後期に北部九州で学んだ真宗僧侶は直接的にも間接的にも亀井南冥や昭陽と繋がることになる。亀門と真宗との影響関係は解明せねばならない課題となるであろう。

三、大忍の集書活動（焰蓮寺時代）

大忍の識語や蔵書印には「筑前大忍」と「筑紫大忍」

の二つがある。大忍は嘉麻郡佐与村（現在の飯塚市）の
沼蓮寺（浄土真宗本願寺派）から明治二年（一八六九）
十一月十三日に妙徳寺に入り、翌年六月一日に住職に就
任している。明治三年（一八七〇）に出された「平民名
字許可令」により、僧侶も苗字を名乗るようになるので、
「筑前大忍」の識語は妙徳寺に入寺する以前の沼蓮寺時
代、「筑紫大忍」は妙徳寺に入寺した後の妙徳寺時代に書
き込んだと考えられる。これにより二つの地域での集書
活動が解明できることになる。

大忍が生まれ育った沼蓮寺は嘉麻郡佐与村にある。沼
蓮寺は元和年中（一六一五〜一六二四）に賢正が開基し
た寺院である。⁽²³⁾ 沼蓮寺のある嘉麻郡佐与村は福岡藩領で
あり、近くには小倉と長崎とを結ぶ長崎街道の宿場町飯
塚があった。長崎街道は小倉から飯塚、田代を通り、佐
賀、鹿島、諫早を経て長崎まで至る街道で、諸大名の参
勤交代や長崎奉行などが江戸へ向けて通る道筋でもあり、
舶来の文物や長崎へ遊学する学者や医者たちが往来する
賑わいある街道でもあった。この長崎街道の他には博多
へ出る博多往還（篠栗街道）や日田へ出る日田街道（小
石原街道）などもあった。さらに飯塚から香春を経由し

て瀬戸内の周防灘方面の椎田へ出ることができ、椎田は
小倉と豊前とを結ぶ豊前道と交わっている。ここで、ここ
ら豊前へも出ることができる。⁽²⁴⁾ 実際に文久二年に佐与村
の白土仁六他十名の伊勢参りをした道中記が残されてい
るが、それによれば二月十七日に出発した一行は初日の
旅を終え、豊前国田川郡の香春に宿をとり、翌日は小倉
城下へ出ている。⁽²⁵⁾ 街道が交差する飯塚宿の文化圏に佐与
村の沼蓮寺もあつたわけである。

大忍が所有していたと明らかに確認できるのは版本四
十三冊、写本八一冊、近代活字本二冊である。版本四三
冊の内、「沼蓮寺」の識語が見えるものは六冊で、残りの
三八冊には「筑紫大忍」の蔵書印が押されていた。これ
により版本の多くは妙徳寺に入寺した以降に集められた
ものであることが分かる。沼蓮寺時代のものは、『大学章
句』（沼蓮寺）、『御家流庭訓』（紫雲山沼蓮寺什物）、
『浄土畧名目圖見聞』上・下（沼蓮寺常什物香霖也）
などである。その内、『浄土畧名目圖見聞』は沼蓮寺六世
香霖のものを受け継いで所持していた。妙徳寺時代に集
めたものは『実語教・童子教』、『タスケタマへ考』（原口
針水、明治二五年出版）、『タノム考』（原口針水）、『御五

帖壹部示珠指』（九冊）、『三国七高僧御一代記図絵』（上・下）、『横河法語講義』（上・下）、『蓮如上人御一代記聞書略解』（五冊、明治三年～明治二七年）、『五悪段因果実体験録』（五冊、明治二十一年）、『浄土和讃講義』（五冊、明治二三年）、『高僧和讃講義』（三冊、明治二三年）、『正像末和讃講義』（三冊、明治二三年）、『浄土真宗礼讃偈』二冊（明治二一年増補再版）である。その多くが明治二十年代に出版されたもので、大忍は明治三五年に逝去していることを踏まえると、晩年まで版本の蒐集をしていたことになる。

写本には大忍が記した識語が残されているものが多く、その識語から大忍の活動の範囲を知ることが出来る。写本に関しては妙徳寺入寺以前と入寺以後との二つに分けて大忍の学びの足跡を辿っていききたい。

妙徳寺入寺以前に写本を識語に記されている年代順に並べてみると次のようになる。

- ① 「安政二卯十二月上旬 釋大忍」（『浄土和讃望溟記』上）
- ② 「維時安政二乙卯晚冬上旬第四日 於豊後国玖珠郡 森府専光精舎写書竟 大忍」（『仏説阿弥陀経随聞記』）

- ③ 「維時安政三辰晚春上旬第七日於豊前国中津照雲寺写求之」（『正信偈聴録』）
- ④ 「維時安政三辰晚春下旬二書求之於豊前国中津照雲寺写之 筑前大忍」（『回願聴記』）
- ⑤ 「慶應二丙寅十一月御忌中筑前大忍」（『玄義分六字积義會録記』）
- ⑥ 「浄土文類聚鈔 勸学善議大和尚吼説 慶應三丁卯十月朔日開講四日市御坊所 筑前大忍」（『浄土文類聚鈔聴記』）
- ⑦ 「于時慶応三丁卯極月中下旬第二日中津信昌寮近□ニテ新助ト申ス屋宅ニテ写之畢 筑前僧大忍」（『教道議・教道記』「教道議」）
- ⑧ 「慶應四年辰五月三日新々密西窓ノ下テ写之畢又」（『讚偈讚若不生者聴記』）²⁶
- ⑨ 「于時慶応四辰五月下旬信昌菴北窓下ニテ病中写之得 筑前大忍」（『殿中問答記』）
- ⑩ 「于時慶應四戊辰五月下旬第六日 於信昌寮北窓之下寫得之」（『棧法一体』）
- ⑪ 「于時慶應四戊辰五月下旬第八日閑亭山本堂ニ於テ写之畢又」（『五重之義聴記』）

⑫ 「于時慶應四戊辰六月朔日於信昌寮北窓下写之 今
日八実八晴天ナレトモ夕立致スコト」(「二種深信聰
記」)

焔蓮寺時代の写本に記した識語で着目したいのは、書
写した場所である。②の識語に「豊後国玖珠郡森府専光
精舎」とあるが、これは専光寺のことである。⁽⁷⁷⁾ 大忍が訪
れた時の住持は第十三世得隣で、中津照雲寺に生まれ兄
の善讓に従って宗学を学び、嘉永二年(一八四九)に専
光寺に入寺し、境内に「敬信閣」を開設し多くの僧侶を
指導した学僧であつた。⁽⁷⁸⁾ 得隣の兄の善讓は豊前中津照雲
寺の第十一世住職を務めた人物で、空華学派を受け継ぎ、
文久二年(一八六二)に勸学職に補せられている。⁽⁷⁹⁾ 飯塚
から森城下までには日田を経由しなければならぬ。日
田には赤松連城が学んだ廣瀬家の咸宜園もあつたが、大
忍が咸宜園ではなく得隣の門を叩いたのは、真宗教学を
学ぶことを明確に意識していたからであろう。

③・④の安政三年(一八五六)三月に書写された写本
には「豊前國中津照雲寺」と記されている。これは善讓
が住持していた寺院であり、大忍が得隣のもとで学んだ
後に得隣の兄でもあり師でもある善讓のもとで学んでい

たことが分かる。善讓は文政十年(一八二七)に京へ上
り宗学を修め、天保八年(一八三七)に自坊に戻り、信
昌閣を設けて学徒に教授していた。大忍はこの信昌閣で
空華学派の学問を学んだのである。この安政三年からは
大洲鉄然も善讓のもとで宗学を学んでおり、善讓及び信
昌閣の名は豊前だけに止まらず、海を越えた周防まで知
れ渡っていた。⁽⁸⁰⁾ 写本⑦・⑨・⑩・⑫の識語にも「信昌閣」
と見え、⑪の「閑亭山」は照雲寺の山号であるので、慶
應三年(一八六七)十二月から慶應四年六月まで信昌閣
で学んでいたことが分かる。同じく慶應三年の文字が見
える識語を有するのが写本⑥である。この年の十月に善
讓の講義を四日市御坊所まで聞きに行っていることが分
かる。⁽⁸¹⁾ これらの識語から焔蓮寺時代の活動が、焔
蓮寺のある飯塚より南西方向の玖珠や中津、四日市(宇
佐)に展開していることが明らかになった。

朝倉三奈木の品照寺に所蔵されている典籍の識語をも
とに江戸後期に活躍した品照寺覚円の足跡を辿ったこと
がある。⁽⁸²⁾ 覚円の活動領域は朝倉から北東に広がり、特に
糸島の蓮照寺に滞在して版本を購入したり、書写したり
して書物を蒐集していたことが判明した。品照寺の歴史

になつていないので、覺円の生没年は不明であるが、識語は天保九年（一八三八）から安政五年（一八五八）の二十年間のもので残されているので、大忍よりもやや上の世代であると考えられる。江戸後期に活躍した覺円と大忍との違いは生まれた場所であり、これが両僧の活動を展開する方角を違わせた原因であると考えられる。品照寺がある三奈木は福岡藩の家老加藤家の領地で、博多から見ると支藩の秋月藩より奥地にあるが、本藩の支配下にある。そのため福岡城下との往来も盛んであり、福岡藩の文化領域となるだろう。覺円が大忍の中津方面とは異なる福岡方面に学びの場を求めた理由も、三奈木という場所柄があつたと考えられる。

四、大忍の集書活動（妙徳寺時代）

大忍は明治二年（一八六九）に沼蓮寺から妙徳寺に入寺し、翌三年に第十三世住職を継職した。寺伝によれば明治十一年（一八七八）に福岡寺務出張所から鹿児島掛所への出張を命じられている。本願寺派はこの前年の明治十年の九月に假掛所を設け、翌十一年の九月に別院を

建設している³³⁾。大忍が鹿児島に赴いたのは鹿児島布教が始まつたばかりの頃であつた。三月に第一回の巡回を、五月に第二回の巡回を行つてゐる。大忍は十月に福岡に戻つたが、翌明治十二年に再び鹿児島布教を命じられ、明治十三年八月まで知覧などで布教を行つた。福岡に戻つた大忍は明治十六年（一八八三）十二月に福岡組長となり、自坊の法務の他に福岡の本願寺派寺院を取りまとめる役割も担つた。明治二十二年（一八八九）四月以降、度々鹿児島での滞在布教が命じられ、福岡と鹿児島との往復する生活は晩年まで続くことになつた。

妙徳寺時代に集めた写本に記された識語を年代順に並べると次のようになる。

⑬ 「明治四辛未六月上旬写之畢 妙徳寺住大忍藏」（『易實遺話聴記』）

⑭ 「明治十七年三月写得之 筑紫大忍」（『願主不思議譚』）

⑮ 「于時明治十七年十月上旬肥前国神崎郡杠山ノ内松尾善正寺二五晝夜説教中写得之」（『大経成就文講録』）

⑯ 「此書ハ私者明治廿一年四月十一日八屋賢明寺ヲ初メ地方説教巡回之節同寺二五月十五日ヨリ一周間説

教シ期合ニ依テ五日間同寺ニ休息ノ際別ニ此書ヲ一冊写コトヲ被レ頼其褒賞トシテ之ヲ授与セラル、物也見者ノ疑ヲ除シカ為所持スル由來ヲ記ス 筑紫大忍物（『法語備忘録』卷之上）⁽³⁴⁾

写本⑬は明治四年六月に書き写されたもので、ここには「妙徳寺住大忍」と記しているが、写本⑭には「筑紫大忍」と記しており、妙徳寺時代は筑紫姓を名乗っていることが確認できる。注目したいのが写本⑮・⑯の識語である。⑮の方は「善正寺二五昼夜説教中写得之」と記されており、明治十七年（一八八四）に神崎善正寺に赴いて説教をしていたことが確認でき、前年の明治十六年に福岡組長となった大忍が神崎まで移動していたことが分かる。⑯の識語には、明治二十一年（一八八八）の地方説教の巡回で豊前の堅明寺に五月十五日から一週間滞在した際に入手したものであることが記されている。この写本には原写本の識語も書写されており、そこには次のように記されている。

已上中教正勸学善讓師之法語也予多年於此師所留学シ此ヲ随聞筆記ス而メ后明治十四年六月ノ日再ヒ此書ヲ檢シ玉ハンノヲ乞師檢スルコト訖而吾ニ与ルニ

朱墨ヲ以テシ玉フ即同年十月ノ日也 豊前国上毛郡千束町正円寺福田行忍 明治十四年二月

福田行忍は善讓のもとで学んだ学僧で、没後に勸学を贈られている人物である。⁽³⁵⁾ 生まれは越中島尾村であるが、文久元年（一八六一）に信昌閣で学び、明治元年（一八六八）に正円寺に入り第十五世として受け継いだ。この写本⑯『法語備忘録』の原本は行忍がまとめた善讓の法語集である。これには文久二年（一八六二）九月八日から、明治九年（一八七六）十一月二十七日までの善讓の法語が記されている。行忍が善讓に付き従い、師の口述を一言も欠くことなく残そうとした書であり、一般に流布することを目的とはせず、行忍の個人的な学び書物として作られたようだ。そのため、行忍は善讓にこの法語集の検閲を求めたわけである。善讓のもとで学んだ大忍にとつてもこの書物は貴重な法語集であつたに違いない。大忍がこの書物を書き写した際に入手した由来を敢えて記したのは、この書物が一子相伝的な秘匿性を有していたからだと考えられる。

写本⑮・⑯の識語は共に大忍が説教のため訪れた寺院で入手していることも指摘しておきたい。沼蓮寺時代は

学問のために学僧を尋ね、その地で学問に必要な書物を書き写していた。そのため大忍の主體的な学問への姿勢があり、集書という目的意識が明確にあった。一方の妙徳寺時代のものは、各地を説教巡回する際に副次的に入手した写本であり、集書という目的意識がないままに集められたものである。翻つて言えば、書物を集めることを念頭にしていない集書活動は、各地を巡回する僧侶という特別な職業にあつたからこそ生まれたとも考えられる。

小結

妙徳寺円超・大忍の集書活動について明らかにしたこと整理し、浮かび上がる課題を述べて本稿を結びたい。

円超の場合、多くの漢学者を集めていた。特に亀井南冥・昭陽父子の書物を書写していたことが分かった。大忍の場合、焔蓮寺時代は教学を学ぶための集書活動を行っており、善讓・得隣兄弟の門を叩き、書物を書写していたことが分かった。妙徳寺時代は福岡で宗派の役割に

就き、また鹿児島開教の任務も負っていたため、時間的に制約されていたが、その中でも赴いた先で書物を書写していたことが分かった。これらのことにより、江戸後期から明治にかけて生きた真宗僧侶は、仏教書以外にも漢学書も収集し、さらに学びのために藩を越えて師を求め、そこで書物を収集していたという事例を得ることができた。

そして円超・大忍両僧の集書活動から見えてくる課題について述べておく。まず真宗僧侶の文化圏の問題が挙げられる。見てきたように典籍の識語から福岡城下の円超は福岡を出ていないようである。大忍の場合は、焔蓮寺時代には飯塚を起点に玖珠や中津に足を伸ばし、妙徳寺時代には説教巡回のために各地へ赴いている。焔蓮寺時代の大忍が藩を越えて北部九州の東側に展開したのに対して、飯塚と同じ内陸部の朝倉に生まれた品照寺寛円は福岡藩内の西側に展開している。同じ福岡藩の領内にあっても、僧侶が生活していた地域によって文化圏の違いがあつたことが見えてくるだろう。学問のために移動して書物を集める僧侶の活動は、より俯瞰的に考察していかねばならないだろう。



〔参考〕 円超・大忍の訪問地図（境界は現在の県境。品照寺
覚円も含む）

次に真宗僧侶の学際化が挙げられる。仏典のほとんどが漢文で書かれているため、僧侶にとって漢文は学ばなければならぬものであった。儒学書の四書五経の類が漢文読解の初学書の役割を果たしていたと考えられる。妙徳寺の円超は儒学書の中でも、亀井南冥・昭陽父子の書物を書写していた。さらに円超は荻生徂徠の『徂徠集』も蒐集しているので、意図的に荻生徂徠の護園学派の学問を摂取しようとしたことが伺える。引野氏が調査した広島福山の太東坊の所蔵典籍にも荻生徂徠や服部南角、太宰春台らの著作も含まれていた⁽⁶⁾。この事例を踏まえると、真宗僧侶における護園学派の学びは当時の真宗僧侶の学問の一つになっていたのではないかと考えられる。護園学派の受容は、真宗僧侶の学問の学際化という問題を提示してくれているだろう。

僧侶の集書活動を見ると、書物が移動しているのではなく、僧侶が移動して書物を集めていることが分かる。それは僧侶の集書活動の背景に学問があるからだ。経典や講録を書写すること自体が学びであり、その学びのために書物を集めているためである。本屋を通して書物が流通する事例とは違う事例が僧侶の集書活動から見えて

くることになる。その僧侶の集書活動も、個々の僧侶により異なっていることが改めて分かる。妙徳寺円超・大忍の場合でも、両僧が集めた書物は異なっているし、活動領域も異なっている。冒頭でも述べている通り、事例の蓄積が最も必要な事柄で、真宗僧侶の集書活動や学問を解明するためには、多くの真宗寺院の蔵書調査を行わなければならないのであり、これこそが一番大きな課題となるだろう。

【註】

- (1) 西国真宗史研究会としては「品照寺所蔵『出入覚書之扣』」（『佛教史研究』五五号、龍谷大学仏教史研究会、二〇一七年）の史料報告がある。
- (2) 岡村喜史・奥本武裕・木本拓哉・松尾一『妙徳寺のあゆみ』（妙徳寺、二〇一八年）。文章中の寺伝の内容はこの寺史によった。
- (3) 代表は中川正法。筑紫女学園大学創立一〇〇周年記念事業の一環として設置され、現在も活動は継続して行われている。その調査成果は『西国浄土真宗文化財調査研究報告書（一）』（四）、中川正法・緒方知美・遠藤一編『九州真宗の源流と水脈』（法蔵館、二〇一四年）と

して刊行されている。

- (4) 大谷籙子（明治十五年〔一八八二〕～明治四十四年〔一九一〕）は、九条道孝の娘で、妹は大正天皇の後である貞明皇后（九条節子）である。女子教育に尽力した。島地黙雷（天保九年〔一八三八〕～明治四十四年〔一九一〕）、赤松連城（天保十二年〔一八四一〕～大正八年〔一九一九〕）はともに明治時代初期の本願寺教団を支えた僧侶である。両僧に関しては井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』（永田文昌堂、一九七九年）島地：三〇一～三〇三頁、赤松：三三六～三三七頁を参照。
- (5) 福岡古文書を読む会校訂、青柳種彦編輯『筑前國續風土記拾遺 上』（巻三、福岡神社仏閣 下）、一九九三年）六九～七〇頁。
- (6) 飛檐とは本山参拝の際の本堂や御影堂内で座ることが許された場所のことで、院家・内陣・余間・三之間に次ぐ座である。
- (7) 若尾政希「『書物の思想史』研究序説…近世の上層農民の思想形成と書物」（『一橋論叢』一三四（四）、二〇〇五年）五二二頁。
- (8) 引野亨輔「近世真宗僧侶の集書と学問…備後国沼隈郡大東坊を素材として」（『書物・出版と社会変容』三、二〇〇七年）。

- (9) 『龍谷大学三百五十年史 通史篇 上巻』(第一章、第一節三業惑乱、二〇〇〇年) 一二五〜一五七頁。
- (10) 前掲註(9) 『三百五十年史』、二〇九頁。
- (11) 前掲註(9) 『三百五十年史』、二二五・二六六頁。
- (12) 僧樸(享保四年〔一七一九〕〜宝暦十二年〔一七六二〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、一八一〜一八七頁)、初名は関樸で休々子と号す。法霖の門人で、京都宏山寺の第五世住職。
- (13) 僧鎔(享保八年〔一七二三〕〜天明三年〔一七八三〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、一八七〜一八九頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二七頁) は越中善巧寺の第十一世住職。僧樸門下の上首となる。大瀛(宝暦九年〔一七五九〕〜文化元年〔一八〇四〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、一九三〜二〇二頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二〇・二二一頁) は、諱は廓亮で苾園と号した。僧樸門下の慧雲に学ぶ。備後正満寺・安芸勝円寺・石見浄土寺に住持し、広島城の西に苾園舎を設けて教育に励んだ。
- (14) 曇龍(明和六年〔一七六九〕〜天保十二年〔一八四一〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、二六五・二六六頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二一・二二二頁) は万行寺第十七世住職。慧雲に学んだ後、大瀛に師事し、文政八年(一八二五)に勧学となった。崇廓(享保十四年〔一七二九〕〜天明六年〔一七八六〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、一七九頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二二頁) は教覚寺住職。僧樸門下で、僧鎔・慧雲と並び称される。大同(〜天明二年〔一七八二〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、二一四・二一五頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二四頁) は、教法寺住職。僧樸に学んだ。環中(寛保二年〔一七四二〕〜文化三年〔一八〇六〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、五一頁。前掲註(9) 『三百五十年史』、二二五頁) は東光寺第九世住職。三業惑乱の際、大瀛の学説により回心した。
- (15) ここでの漢学書は仏教書に対する分類とし、儒学書は勿論のこと漢文学や漢詩に関する書物も含めている。
- (16) 第五世三伯には子どもがおらず、三伯の後を継ぐために早良郡山門村の要心寺(現在は真宗大谷派)から入寺することになった。その際に第三世にあやかり松雲を名乗りことになったが、この識語から元禄十六年には妙徳寺に入寺していたことが判明する。
- (17) 玄雄は(文化元年〔一八〇四〕〜明治十四年〔一八八二〕。前掲註(4) 『学僧逸伝』、九二・九三頁) は、曇龍の門人で筑前宗像正蓮寺から大阪薩摩堀専念寺へ転住した人物。針水は(文化六年〔一八〇九〕〜明治二十五年〔一八九二]) は、曇龍の門人で肥後山鹿光照寺住職。
- (18) 麟兮はこの他に版本『古文孝経』(識語「文政八年乙酉

夏五月下旬求之」も手に入れていた。

- (19) 亀井南冥(寛保三年(一七四三)〜文化十一年(一八一四))、諱は魯、字は道載、南冥はその号である。黄檗僧大潮に師事し、都へ上つてからは永富独嘯庵の門下に入った。独嘯庵は荻生徂徠の高弟山県周南に学んだ人物であるので、南冥は護園学派に属す。亀井昭陽(安永二年(一七七三)〜天保七年(一八三六))、諱は昱、字は元鳳、通称は昱太郎、昭陽はその号である。寛政四年(一七九二)に家督を継ぎ藩校甘棠館祭酒となる。南冥と昭陽とに關しては、荒木見悟『亀井南冥 亀井昭陽』(叢書日本の思想家 二七、明德出版社、一九八八年)によつた。
- (20) 前掲註(14)大同。
- (21) 辻本雅史『近世教育思想史の研究―日本における「公教育」思想の源流―』(思文閣出版、一九九〇年)一五一頁。
- (22) 拙稿「品照寺覚円の学問と足跡―所蔵典籍の識語を通して―」(筑紫女学園大学『人間文化研究所年報』第二九号、二〇一八年)八六頁。
- (23) 『飯塚市史』(下巻、第六編 宗教、第一章 神社・寺院・教会)、二〇一六年)一五頁。
- (24) 『香春町史 上巻』(第四編、第二章、四 小倉街道と

宿場町香春」、二〇〇一年)五六一〜五九二頁。

- (25) 『穎田町史』(第一編、第四章、二二お伊勢参り)、一九八四年)一一二・一一三頁。もとの史料は『伊勢西国参宮道中記』(文久二年)であるが、ここでは町史によつた。
- (26) 写本⑧・⑩・⑪・⑫の識語は合冊本『讀偈讀若不生者筆記』に記されている。
- (27) 専光寺は円天寺と称した天台宗の寺院であつたが、六世了專の代の寛永十二年(一六三三)に真宗に改宗し専光寺と号した。当時は太田村にあつたが、八世了空の時に森城下に移つた(『玖珠町史』(下巻、第七編 第二章 寺院)、二〇〇一年)四八頁)。
- (28) 得隣(文政五年(一八二二)〜明治三十一年(一八九八))については、前掲註(4)『学僧逸伝』、二六一頁を参照。
- (29) 善讓(文化三年(一八〇六)〜明治十九年(一八八六))については、前掲註(4)『学僧逸伝』、一六九〜一七一頁を参照。
- (30) 大洲鉄然(天保五年(一八三七)〜明治三十五年(一九〇二))。前掲註(4)『学僧逸伝』、二四五〜二四八頁)は周防大島覚法寺第十一世住職。はじめ月性に学び、その後善讓のもとで学ぶ。長州征伐の際には護国団を結成し、幕府軍と戦う。維新後は島地黙雷らと真宗分離運動を指

導した。

- (31) 四日市は元禄十一年（一六九八）に幕府の直轄地となっている。幕領四日市に関しては『大分県史 近世篇三』（「幕府領四日市」、一九八八年）五三三〜五八三頁を参照。本願寺派の四日市御坊は延享四年（一七四七）に時の寺社奉行大岡忠相により、正明寺の西本願寺への差し上げが許可され成立した。文化三年（一八〇六）に本願寺第十九世本如は親鸞の六百回大遠忌に合わせて九州一の別院の建立を計画し、安政六年（一八五九）に十九間四面の大伽藍が完成した（日浦保徳『九州真宗史と四日市別院』（「本願寺四日市別院史」、本願寺四日市別院、一九七二年）一三三〜一四八頁）。
- (32) 前掲註(22)拙稿。
- (33) 『鹿児島県史 第四卷』（一九四三年）五三二〜五三四頁。堅明寺は禅宗寺院であったが、寛永十六年（一六三九）に字号を下付されている（『豊前市史 上巻』（「第五編 近世 第九章 仏教と神道」、一九九一年）天明六年（一七八六）寺院一覧、一一〇八・一一〇九頁を参照）。
- (35) 前掲註(4)『学僧逸伝』、七二・七三頁。